

進化するラグジュアリーライフスタイルの現在

INSPIRING THE LUXURY LIFESTYLE

MansionGlobal

JAPAN

POETIC LIGHTING

美しい光を”詩的”に
操る木村浩一の建築



List

Sotheby's
INTERNATIONAL REALTY



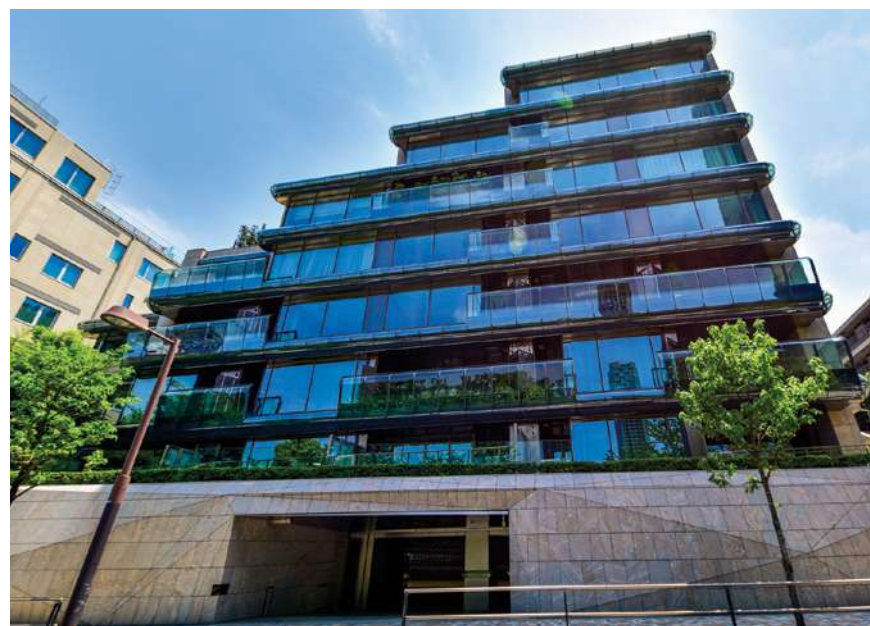
Moving Hearts with the Extraordinary

私たちはSotheby's International Realty®のネットワークを生かし、グローバル化が進む不動産マーケットの特性をすばやくキャッチ。将来を見据えた不動産探し、お住み替え、賃貸・運用など、あらゆるニーズに最適なお提案をいたします。居住用から事業・投資用、リゾート物件まで、お客様だけの「価値ある不動産」選びは、いまや国境やジャンルにとらわれないボーダレスな時代へと突入しています。その最先端をいくのが、私たちList Sotheby's International Realtyです。

For inquiries, please email list-tm@list.co.jp.

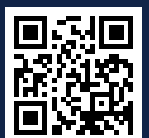
物件に関するご質問は、list-tm@list.co.jpまでご連絡ください。

Sotheby's International Realty® and the Sotheby's International Realty Logo are service marks licensed to Sotheby's International Realty Affiliates LLC and used with permission. List Sotheby's International Realty fully supports the principles of the Fair Housing Act and the Equal Opportunity Act. Each franchise is independently owned and operated. Any services or products provided by independently owned and operated franchisees are not provided by, affiliated with or related to Sotheby's International Realty Affiliates LLC nor any of its affiliated companies. If your property is listed with a real estate broker, please disregard. It is not our intention to solicit the offerings of other real estate brokers.



List Sotheby's International Realty は、日本、ハワイのほか、香港、シンガポール、タイ、フィリピンに拠点を構え、高級不動産の仲介業務と投資関連業務を展開しています。さらに現地に精通したスタッフによるリサーチ・コンサルティング、そして世界各地の開発者と連携した新築不動産の販売情報を提供するなど、躍動するアジアのエネルギーを最大化。アジア・太平洋エリアにおける豊かさの連鎖を加速させるべく、私たちは新たな道を切り開いています。

*画像はイメージです。





————— **ポルトギーゼ・パーペチュアル・カレンダー Ref. 5034:**
セーリングは何よりも自然や技術と人の結びつきが強いスポーツです。風を正しく読み取り、的確な操船で波の上を滑るように進めば、そのダイナミックな一体感を存分に味わうことができます。遥か昔、フェルディナンド・マゼランやヴァスコ・ダ・ガマといったポルトガルの船乗りたちにとって、帆船は未知の海路や新世界発見の鍵を握るものでした。同様に、今ではこの上なくスタイリッシュな海の旅となったセーリングを楽しむ、現代の探検家や冒険者が

大切にしているものがあります。彼らのタイムピース選びに妥協はありません。IWCを象徴するデザインの18Kホワイトゴールド製「ポルトギーゼ・パーペチュアル・カレンダー」は、極めて高い機能性と優雅さが見事に融合しています。ポルトガル大航海時代の航海者たちの精神を見事に捉えた類まれなるモデルです。腕に纏うと、現代の挑戦者に通じるその志が、時を超えて共鳴することでしょう。

男のために設計された時計、IWC。

IWC SCHAFFHAUSEN BOUTIQUES: TOKYO | OSAKA | PARIS | NEW YORK | GENEVA | ZURICH | SHANGHAI | HONG KONG | SINGAPORE | TAIWAN
WWW.IWC.COM/JA

IWC Boutiques Ginza 0120-26-1868 Osaka 0120-27-1868 Contact info 0120-05-1868 or concierge.japan@iwc.com

FOLLOW US ON:    

**ENGINEERED FOR MEN
WHO CONQUER THE ELEMENTS.**



IWC
SCHAFFHAUSEN

Editor's Letter



NORIHITO YAMAUCHI

『Mansion Global Japan』を創刊し、たくさんの読者やクライアントのみなさんに集まっていたいただいたローンチパーティーを開催した7月から数えて早くも3ヶ月が経過、季刊発行の本誌も第2号目を迎えることとなりました。

巻頭を飾る定番の著名建築家・デザイナーのインタビュー企画では、来年に迫った東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のメイン会場となる新国立競技場のデザインに関わった世界的建築家、隈研吾さんの事務所にお伺いし、将来に向けたサステナブルな建築の重要性などについて語っていただきました。

また続くページでは、コンクリート打ち放しの重厚感漂う構造が目を引く住宅を手がけた木村浩一さんをインタビュー。一見すると無機質なコンクリートの空間に、計算された自然光を呼び込むことで「禅=ZEN」の空間を巧みに作り出す建築家の哲学に迫ります。

そして2019年はドイツで生まれ、美術や建築の教育を先導した「バウハウス」が誕生して100年目に当たる記念すべきマイルストーンです。日本国内のみならず、世界各国でこの先進的なデザインスクールの功績を讃える展覧会、企画展が開催されていますが、Mansion Globalでは、創設者の一人であるヴァルター・グロピウスの功績をたどりつつ、現代の高級住宅市場でも高い人気

を誇るバウハウス流デザインの魅力を解き明かします。

また現在進行形でラグビーワールドカップ2019日本大会がここ日本の地で開催されていますが、そのラグビーの世界で史上最高のプレイヤーの一人として数えられ、現在、日本国内でプレーするダン・カーター選手を取材。国内でのラグビー観戦に合わせて訪れたい、お気に入りの旅先について語ってもらいました。

このように、今号もラグジュアリーなライフスタイルをグローバルにカバーするバラエティ豊かなコンテンツが揃っています。ぜひ、お楽しみください。またいつもの通り、マガジンに関するフィードバックや、次号以降のコンテンツの素晴らしいアイデアがありましたら、ぜひとも下記のメールアドレスにご連絡いただければ幸いです。



Simon Farrell
Publisher

Mansion Global Japan
simon@custom-media.com

洗練されたライフスタイルをお届けする



Showroom:

Poggenpohl Tokyo
5-1-11 Minamiazabu, Minato-ku
106-0047 Tokyo Japan

Tel: (81) 03-5798-7950

Fax: (81) 03-3280-2750

info@poggenpohl.co.jp

poggenpohl.co.jp

poggen
pohl

1892年創業のポーゲンポールは、世界でもっとも由緒あるラグジュアリー・キッチンシステム・ブランドです。キッチンのデザイン提案、新築物件での設置施工、リノベーションからアパートメントやオフィスまで、キッチンに関する幅広いサービスを提供しています。

お気軽にお問い合わせください。

Publisher
Simon Farrell
President
Robert Heldt
Editor-in-Chief
Shogo Hagiwara

Art Director
Ximena Criaes
Graphic Designers
Yuki Masuko
Chikako Fukui

Web Developers
Brian Susantio
Devin Surya Putra
José Murinello

Journalists
Nina Oiki
Koichi Yamaguchi
Rie Noguchi

Translator
Yuka Katagiri

Consultants
Yoshio Hiramatsu
Kunio Kikuchi

**For advertising inquiries,
please contact us at
mg@custom-media.com**

Project Manager
Edvard Vondra
edvard@custom-media.com

Account Managers
Kotaro Toda
toda@custom-media.com

Garreth Stevens
James Greer
Toshiya Haraguchi

10

Interview

次世代のライフスタイルをデザインする

隈研吾

東京五輪のメイン会場となる新国立競技場のデザインに携わった世界的建築家をインタビュー。



SATOSHI ASAKAWA

12

Mori's Biggest Ever

“ヒルズの未来形”が30年の時を経て始動する

東京の都市開発を最前線でリードしてきた森ビルが、“最大級のスケール”と誇る「虎ノ門・麻布台プロジェクト」の全容とは。



16

Beautiful Architecture with “Poetic” Lighting

光を“詩的”に操る、木村浩一の建築

コンクリートと自然光の絶妙なバランスで厳かな空間を作りあげる建築家の哲学に迫る。



Daiwa Azabudai Bldg. 6F
2-3-3 Azabudai, Minato-ku, Tokyo 106-0041
Tel: 03-4540-7730

For advertising inquiries, please contact us at mg@custom-media.com

www.custom-media.com

Mansion Global Japan magazine
Autumn 2019 issue,
Copyright 2019, Custom Media K.K.

Reproduction in whole or in part without written permission is prohibited.

All rights reserved.
See the magazine online at
www.mansionglobal.jp

Printed by Bun-shin

Printed on paper certified by the US Forest Stewardship Council with vegetable oil ink certified by The Japan Printing Ink Makers Association.



20

Rugby Legend Picks 5 Favorite Spots in Japan

元ラグビーニュージーランド代表、ダン・カーター選手が選ぶ日本のお気に入りスポット。



22

Bauhaus's Long-Lasting Influence バウハウスの功績

ドイツにバウハウスが創設されて100周年。
いまでも高い人気を誇るデザインスクールの功績を解き明かす。



28

Timeless Glass Houses

“グラスハウス”の 色あせない魅力

ガラス張りの建築様式が放つ趣きとは？
1949年に建てられたフィリップ・ジョンソンの
代表作から現代までを俯瞰する。

人類の新たなライフスタイルを デザインする建築家、隈研吾

By Koichi Yamaguchi



1

「新国立競技場」や、第五期「歌舞伎座」(2013年)などの設計に関わった、日本を代表する建築家、隈研吾氏。他にも、青山の名所のひとつである「根津美術館」(2009年)をはじめ、現代の東京の顔ともいえる数々の建築を手がけてきたことでも知られている。昨今は木材を多用した作品で海外からも注目を集めており、フランス東部の都市ブザンソンにある「ブザンソン芸術文化センター」(2012年)やブラジルの「ジャパン・ハウス サンパウロ」(2017年)など、“木の建築”の第一人者として国内外で数多のプロジェクトを手がけている。

1. 日本を代表する世界的建築家としてグローバルにプロジェクトを手がける隈研吾氏。2. 新国立競技場(東京都新宿区)。掲載しているパースは完成予想イメージであり、実際のものと異なる場合があります。植栽は完成後、約10年の姿を想定しております。3. WE Hotel Toya(北海道洞爺湖町) 4. 竹屋(北京) 5. Shang Xia Shanghai(上海) 6. ナクレ(宮城県仙台市) 7. ファーボ(石川県能美市)

1. J.C. CARBONNE
2. 大成建設・特設計・隈研吾建築都市設計事務所
共同企業体
3. KAWASUMI KOBAYASHI KENJI
PHOTOGRAPH OFFICE
4. SATOSHI ASAKAWA
5&6. MASAO NISHIKAWA
7. TAKUMI OTA

“時間とともに美しく老いていくような建築が、 僕にとっての理想です”

Mansion Global:

来年の東京オリンピックでメイン会場となる、新国立競技場について、コンセプトや注目すべき意匠の特徴などを教えてください。

隈研吾:

今回の東京五輪は、前回の1964年とは対照的な時代に開催されます。1964年は、日本が高度経済成長の真っただ中で、GDPも右肩上がりの時代でした。ところが、現在の日本は経済が停滞し、世界でも類を見ない少子高齢化社会を迎えています。そういう時代において、人々の幸せとは何かを考えるうえでヒントとなるような建物を造りたい。そんな思いで新国立競技場の設計に携わりました。

具体的な話をしますと、たとえば最初のコンペで選考されたザハ・ハディッドの案は最頂部で約70メートルだったのに対し、大屋根を支える構造を単純化するなどの工夫により50メートル以下に抑えました。神宮外苑の環境に調和する建築にしたかったからです。

また、ザハ案は意匠の斬新さが特徴でしたが、これからの時代の建築設計においては、意匠の面白さよりも、どういう素材を使い、どういう産業を振興できるかというように、いわば経済をデザインするという視点が重要だと思っています。新国立競技場では、地方の林業を少しでも盛り上げるべく、日本全国47都道府県の木材を使いました。



2

商業施設、公共施設、教育施設、住宅など、予算も規模も大きく異なるプロジェクトを同時に手がけるに当たって、どのジャンルの案件にも共通するメソッドやアプローチ方法などはありますか。

ジャンルによってアプローチを変えることはありません。美術館でもオフィスでもスタジアムでも、基本的には家のリビングルームのような居心地の良さを感じてもらえる建築を目指して設計しています。

木材を用いるのは、そんな理由からでもあります。木というのは不思議な素材で、同じデザインの建物でも、木で造ると全く違う空間に仕上がります。やはり他の建築素材と比べて人間との付き合いが長いからではないでしょうか。人間は、木があるだけで心地良さを感じる。そのことに気がつ

いて以来、この魔法の力を持つ素材を、建築家として積極的に使うべきだと考えるようになりました。

世界各地でプロジェクトを手がけていらっしゃると思いますが、東京という街の面白さ、難しさは何でしょうか。

東京という街は、江戸時代から人や建物の密度が高かったのですが、常にヒューマンスケールの町並みを保ち続けてきました。僕は、それがある種、日本のさまざまな文化のベースになっているのではないかと考えています。

建築家的な視点でいうと、やはり路地というものに興味を引かれます。路地を歩くと木造家屋が軒を連ね、盆栽が置いてあったり、植栽が施されていたり。これからは、そんなヒューマンスケールな街づくりへのニーズが高まるでしょうし、そうした

“木という温かみのある素材を用いるのは、建築家としての責務だと考えています”

部分が、海外からますます注目されるようになると思います。例えば、谷中、根津、千駄木といった下町の景観は、むしろ海外の人々から評価されていますから。

東京の街、そして建築は今後どのように進化していくべきでしょうか。

これからの東京は、高度成長期のように巨大な高層建築でアジアの他の都市と競うのではなく、ヒューマンスケールを大切にしたいインテリゲンチな都市を目指すべきだと考えています。コンパクトで人々が居心地の良さを感じられる建物や、路地を中心に据えた街づくりを行えば、アジアの他の街とは異なる魅力を獲得できると思います。

例えば、設計に関わった歌舞伎座についても、昔は脇の路地が賑やかでした。かつて歌舞伎座に足を運ぶのは、歌舞伎を鑑賞するためだけではなく、そんな賑やかな路地を楽しむという側面もありました。今回の歌舞伎座ではそんな歴史を鑑み、建物の伝統を継承するだけでなく、路地の賑やかさを取り戻すためにはどうすべきか考慮しながら、エリア全体が歌舞伎座としての魅力を放つような建築を心がけました。

建築もサステナビリティが求められる時代へと変化しています。環境問題に対して建築家が負うべき責務は何だとお考えですか。

サステナビリティというと、二酸化炭素の排出量だとか、カーボンニュートラルだとか、数値的なもので語られることが一般的です。もちろんそれは大事ですが、僕はそれ以上に、住まう人や使う人に癒やしや心地良さを提供できるかどうか——そんな精神的なものの方が建築家にとっては重要だと思っています。その意味で、先ほど申し上げたように木という温かみのある素材を用いるのは、建築家としての僕の責務だと考えています。一般的なサステナビリティという意

味では、コンクリートの建物の寿命はせいぜい100年ですが、木造建築に目を向けると、例えば法隆寺が建立されたのは7世紀ですから、1400年の歴史を誇ります。そういう時間とともに美しく老いていくような建築はサステナブルですし、僕にとっては理想です。

世代を問わず同じ分野で活躍する／した人物の中で、常に注目している建築家がいたら教えてください。

フランク・ロイド・ライトです。彼は、世界一の工業大国となり、高層ビルが次々と建設された20世紀のアメリカ社会に批判的な立場をとった異端児で、“有機的建築”という概念で自然と建築との調和を唱えました。晩年はアリゾナ州の砂漠にタリヤセンというキャンプ場のような施設をつくり、若い弟子たちと共同生活を送りながら、建築教育を実践しました。僕も70歳に近い年齢になって、建築にまつわる歴史観のようなものを若い人に伝えていきたいと考えているのですが、その意味でもライトは気になる存在です。

最後に、今後注力していきたい分野や建築的ジャンルなどはありませんでしょうか。

19世紀までの建築には、その国や地域に応じてさまざまな素材が用いられてきましたが、20世紀には世界中でコンクリートと鉄の建築が一般化しました。しかし、21世紀には再び多様化の時代がくると 생각합니다。僕は、木材以外にも布のような柔らかな素材にチャレンジしたり、カーボンファイバーの建築を手がけていたりしていますが、そうした新たな建築素材の可能性については、今後も追求していきたいと思っています。また、ライトがそうであったように、例えばカーテンであったり、家具であったり、建築以外のデザインも手がけていきたいと考えています。そうしたものを通して、人々のライフスタイルを新しくデザインしていきたいからです。



3



4



5



6



7



MORI'S BIGGEST EVER

“ヒルズの未来形”が30年の時を経て始動する

東京の都市開発を常に最前線でリードしてきた森ビル。

六本木ヒルズ、表参道ヒルズなど開発からタウンマネジメントまで包括的な街づくりを実践してきた長年のノウハウを集約した最新事業「虎ノ門・麻布台プロジェクト」が満を持してスタートした。

Text by Shogo Hagiwara, Maya Nago



上写真:東京の新しい“顔”となる虎ノ門・麻布台プロジェクト。右写真:3つの超高層タワーがメインの建造物。上:充実のフードマーケットも併設する。



世界の都市間競争を勝ち抜く

1986年竣工のアークヒルズに始まり、六本木ヒルズ、表参道ヒルズ、虎ノ門ヒルズなど、国際都市・東京を代表するランドマークを次々と手がけ、時代を先駆ける先進的な都市開発を牽引してきた森ビル株式会社。その森ビルが、30年にわたる歳月を準備に費やし、満を持して始動する最新事業が「虎ノ門・麻布台プロジェクト」だ。

去る8月下旬に都内で開催された記者説明会で、辻慎吾・森ビル代表取締役社長が語ったように、「人・モノそして資金を惹きつける総合的な“磁力”をもつ都市のみが、熾烈を極めるグローバルな都市間競争を勝ち抜ける『都市の時代』」にあつて、東京が進むべき道筋を先導する一大プロジェクトになると期待されている。

この野心的な開発プロジェクトのコンセプトは、Modern Urban Village。「Green」と「Wellness」をキーワードに、圧倒的な緑を擁し、大都会でありながら、自然と調和した環境の中で、人間らしく生活できる次世代のコミュニティ形成を目指すという。

「テクノロジーの進歩で人の生き方までが変化するなか、都市の本質である人を中心に都市開発を考え直した結果、緑に包まれ人と人をつなぐ、広場のような街を意味するModern Urban Villageの考えにたどり着いた」と辻氏は説明する。

当プロジェクトのメインとなる建造物は、3つの超高層タワー。メインタワーは、高さ330メートルで、最上部に約90戸の住宅が入る。世界を代表する国際都市にふさわしい、グローバルスタンダードの「理想の住宅」がテーマで、居住者専用ラウンジ・スパのほか、各住戸専用のエレベーターホールも設置する予定だという。そのほかにも5つ星ラグジュアリーホテル、インターナショナルスクール、充実のフードコート、ギャラリー・ミュージアムなどの文化施設も併設したりと圧倒的なコンテンツを備える虎ノ門・麻布台プロジェクトは、今から4年後、2023年の開業を目指している。

大都会の真ん中に“広場”をデザインする

英国のデザイン界を牽引するトーマス・ヘザウィック氏。

日本で初めてのプロジェクトとなった虎ノ門・麻布台プロジェクトについて聞いた。



これまでの都市開発では、自然と都市の関係が一つの重要なテーマでした。虎ノ門・麻布台プロジェクトでは、その2つをいかに融合させるのでしょうか。

自然は都市にとっての解毒剤であり、現代の硬質で弾力のない都市の正反対にある、ある種の「人間味」を空間に付加するものです。虎ノ門・麻布台プロジェクトのような大規模な都市開発は、ともすると単調で退屈、無機質になりがちです

が、我々はそのに植物を持ち込むことで、柔らかさを実装したかった。大規模で美しく整備された「公園」ではなく、あくまでプライベートな、多くの発見があり変化に富んだ「広場」のような存在を目指しました。

世界には「グリーンウォッシング」と呼ばれるような、建前だけの緑化計画があることも事実ですが、今回はまったく違います。空気の浄化といった植物が都市において果たす「機能的側面」というより、むしろ人間の感情を動かすような、例えば

風に吹かれて、枝葉が動くことで音が生まれるとか、季節の移ろいに応じて変化する庭のような空間を建物と融合させたいと考えたのです。

東京という都市の特性が、デザインのプロセスに与えた影響は何でしょう。

まず、「東京にしかない」と思えるような建築をデザインすることが前提としてありました。我々のスタジオは常に、その場所が抱える特定の課題に対し



て正しい解決策を提示することを目指しています。他の都市では比較的、ここは住宅街、ここは高層ビル街、ここは中層ビル街というふうに区域によって建物の特性が異なりますが、東京はすべてが同じ場所に混在していて、矛盾と共存が同時に起きている。その意味で、東京は一貫性を持たないエキセントリックな都市と言えます。ですから我々は、このプロジェクトで計画されている超高層ビルのすぐ隣に、さまざまなテクスチャーや動き、そして驚きに満ちた、ヒューマンスケールな空間を創出したいと考えたのです。

また、耐震性と気候への対応というのも東京ならではの課題でした。どうすれば構造そのものが主張しすぎることなく、建物の美しさを維持したまま耐震性を持たせることができるのか。寒暖差も激しく雨も多いという東京の気候の中でも、人々がつながり合うような建築とはどのようなものか。それらを解決するデザインを考案するのに腐心しました。

日本でのプロジェクトだからこそ期待されていることはありますか。

今回のプロジェクトは我々にとって、日本が世界に誇るクラフツマンシップを実際に体験することができる貴重な機会です。プロジェクトによっては、デザインが技術に制約されてしまうということが少なくない。常に、技術力とデザインの折り合いをつけることが求められます。一方、日本は世界でも類を見ない高度な技術力を有しています。技術にデザインが制約されないという意味では、我々にとっても特別なプロジェクトです。

どんな体験が私たちを待ち受けているのでしょうか。

プロジェクトの中心は、あくまで親密なガーデンをつくることにあります。しかも、建築の周辺に庭があるというようなありきたりなアプローチではなく、その2つを完全に融合してしまおうというアイデアです。そこで我々は、トレリス（植物をつたわせるための生垣）としての建築を探索するという考えに至りました。駐車場、ショップ、オフィスや住居としても機能し



イギリス出身の世界的デザイナー、トーマス・ヘザウィック氏

て、かつ植物がつたうトレリスのような建築を目指すことで、建物とガーデン、さらには公共スペースという3つの境界線を曖昧にするという両義的なデザインが生まれました。そうすることで余白が生まれ、さまざまな体験を同じ空間で共有することができる。

また、建物に高低差をつけたことで、「ヒルズ（＝丘）」というより「谷」のような雰囲気生まれた点も気に入っています。世界を見渡しても、こんなにも特別でマジカルな場所はどこにもないと思います。

スタジオを設立されてちょうど25年が経ちましたが、今後、新たに取り組んでみたいデザインや課題はありますか。

これから挑戦してみたいのは、健康に関するプロジェクトでしょうか。あるいはインフラの設計や交通のデザインにも興味がありますし、日本での仕事も増やしたい。環境についても学びを深めたいですね。我々の仕事には、常にコラボレーターがいます。クライアントもその一人。つまり、我々だけで物事が完結することは決してないのです。コラボレーターたちのヴィジョンに耳を澄まし、そのヴィジョンを限られた予算の中でさらに一歩先に導くために何ができるのか。さまざまな実験を通じてそのソリューションを探し出すことが、我々の使命です。挑戦が大きいほど、社会的な重要性も増します。その意味で、建築のための素材開発にも非常に興味があります。建築の世界では、非人道的とも呼べる素材が多く使われていますが、環境問題がこれだけ深刻化市中、最終的には分解されるような真にサステイナブルな新素材の開発には、大きな可能性があると感じています。

Beautiful Architecture with “Poetic” Lighting

光を“詩的”に操る、木村浩一の建築

Text by Rie Noguchi Photography by Norihito Yamauchi



コンクリートに覆われた重厚感のなかで、細部まで計算された自然光がリビングに差し込む。まるで教会や寺院の中にいるような厳かな気持ちになる空間。そんな住宅を手がけるのは建築家の木村浩一氏だ。エッジの効いたコンクリートの表現と光の制御で成り立つ建築は、「柔らさ」「静けさ」など空間の印象をまるで魔法のように一変させる。

美しい直線を楽しむ「静寂の家」

滋賀県北部のとある駅から、幹線道路沿いに車を10分ほど走らせると、住宅もまばらになり、緑の田園風景が広がりを見せてくる。そんな住宅と田畑の間に悠然と建つのが「静寂の家」だ。幹線道路から見ると、コンクリート打ち放しの壁がそびえ立つ。しかし一歩敷地内に入ると、一気に視界が開け、左右対称にデザインされた建物の全貌が姿を見せる。

この住宅を手がけたのは、1991年にフォルム・木村浩一建築研究所を立ち上げた建築家・木村浩一氏。滋賀県生まれで現在も滋賀に住みながらシンプルで重厚感のある建築を数多く手がけている。そんな木村氏の建築で最も新しいプロジェクトが、2019年に1月に完成したこの「静寂の家」なのである。

安藤忠雄へのリスペクト

コンクリートの打ち放し作品というと、世界的な建築家である安藤忠雄の作品を思い浮かべるかもしれない。木村氏自身も、安藤をリスペクトしており「安藤建築の魅力は、パンテオンなどのダイナミックな西洋建築的要素と、侘び寂び、余白など日本的なものの考え方や精神性の双方を表現している点で、そこが海外でも評価されているんだと思います。私は安藤建築の美意識をリスペクトしつつ、私なりの視点で空間を構成しています」と話す。実際、「静寂の家」を覆うコンクリート打ち放しの壁も、安藤建築の特徴に通じる意匠といえるだろう。「この壁は、西欧の人にとっては、日本の龍安寺などの石庭に通じる抽象性の美意識=禅(ZEN)として魅力的に映るようです」。

敷地内には、施主が営むコンクリート工場と伝統的な日本家屋が隣接する。広大な敷地のため、当初は建物を分棟させるデザイン案もあったというが、結果的には平屋の建築となった。「やや煩雑な印象を与えるこの環境では、表現として“強度のある建築”がふさわしいと考え、コンクリート造のモニュメンタルなデザインを提案しました。コンクリートのボックスを積み上げ、左右対称を特徴とするこの外観は、スフィンクスのようなだと表現する人もいます」

教会のような佇まい

建物の中に入ってまず圧倒されるのが、天井の高さだ。エントランスからリビングに繋がる扉は天井まで開閉が可能で、直線の美しさが際立つサイドのガラスからは光が差し込む。まるで教会のような佇まいだ。リビングに入ると、ここでも計算され尽くした美しい自然光が注ぎ込み、周囲からの視線を遮りながらも、外観からは想像できない、視覚的な広がりのある空間を内包している。

「ダイナミックな空間の中で、さまざまな光が相互に関わり素材感を際立たせることで、コンクリートに情感を与えています。また天井高の変化や床に高低差をつけることで、ひとつながりの空間内に異なるスペースや機能を共存させて、空間の奥行きや広がりを作り出しています。」と木村氏は説明する。

木村氏は、デザイン性を優先するよりもクライアントである居住者の暮らしをまずは大事にするべきであると語る。確かに木村氏の建築には、生活感を極力抑えながらも、収納やプライバシーへの配慮など、生活者の使いやすさを重視した工夫が随所にみられる。



左ページ:静寂の家と対峙して一望する。「スフィンクスのような」と形容する人もいるというが確かにうなずける。上写真:各所に設計されたスリットから屋内に自然光が注ぎ込む。



YOSHIHIRO ASADA



左奥写真：こちらは写真家のアトリエ兼スタジオとして設計された別プロジェクト「呼応する空間」。左写真：木村浩一氏。



左写真:コンクリートと
自然光の光で構成され
た屋内には、教会のよう
な荘厳な雰囲気が漂う。

美しい光を最大限に

そんな木村氏の建築の特徴は、やはり「光」の表現だ。建築家、ルイス・バラガンの光の表現の美しさに影響を受けているという。

「バラガンは、『ガラスの乱用は、空間との対話、光と陰の効力を奪う』と語っています。世界遺産にも登録されている1948年竣工のバラガン自邸は、ひとつひとつの部屋が、それぞれ最もふさわしい“光”と“陰”で満たされるよう緻密に設計されています」

実際、木村氏が手がけた「静寂の家」、「呼応する空間」も、光は直接的ではなく、計算された開口部の形状を通して間接的に柔らかく入り込むよう設計されている。

「プランニングで大切にしていることは、ストーリー性のある動線で空間を構成することです。そして開口部の位置と大きさを入念に計画することで、豊かな視線を持ちながらも静かな空間を生み出して、日々の生活に潤いを与えてくれます」

木村氏が作り出す建築は、曲線ではなく、エッジが効いている。これも光の表現に繋がるという。

「エッジは光の切り返しがはっきりします。一方、アール=曲線の光は柔らかなグラデーションを作り出します。光の強弱を出すという意味で、私はエッジが好きですね。光を美しく表現して、五感に響く建築を常に目指しています」

最後に自らのポリシーを次のように話してくれた。

「“光の視線”を繊細かつ詩的にコントロールすることで成り立っているのが私の作品です。光を表現し続け、情感に強く訴えかける建築を作ること、きっと何かを突き動かすものが生み出されると信じています」。

木村氏のこの「光」への哲学が、神聖で美しい建築を可能にしているのだろう。

日本の「禅(ZEN)」という美意識

海外でも大きな注目を集める木村氏の建築。その理由を尋ねると「日本人の美意識に深く浸透する『禅(ZEN)』にあります。その美意識に通じる建築であることが海外での評価につながっているのかもしれませんが。“光と陰”のコントラストに潜む凜とした空気感は、禅に通じるように感じます。グローバルな現代だからこそ、(今後も)日本的美意識や感性を表現したデザインが大切になると思います」と答えた。

その木村氏が建築と出会ったのは、大学に在籍中のことだった。1970年代に安藤忠雄を含む「関西の3奇人」と呼ばれた建築家のひとり、渡辺豊和氏の授業を受けたのがきっかけだという。

「京都の山奥に建つ渡辺さん設計の住宅を訪れ、頭上にある半球のドームから光が落ちてくるのを見て、住宅でも大きな情感を呼び起こす空間が作れることにとても衝撃を受けたのを覚えています。それはロジックでは説明ができない感情的なもので、エモーショナルな空間でした。この体験が、私に建築の世界を開いてくれたと思っています」と振り返る。

All Blacks Legend Dan Carter and His 5 Favorite Destinations in Japan

元ラグビーニュージーランド代表、ダン・カーター選手が日本のお気に入りスポットをセレクト

Text & Photography by Nina Oiki



2019年は、アジアで初となるラグビーW杯が日本で開催中の「ワールドカップイヤー」。そのラグビー界で最も有名かつ群を抜く実績を誇り、また誰より“謙虚”なスーパースターとして知られるのが、元ニュージーランド代表の司令塔、ダン・カーター選手だ。

カーター氏は、2018シーズンより日本のトップリーグ、神戸製鋼コベルコスティーラーズに所属。加入1年目から神戸製鋼コベルコスティーラーズを18季ぶりの優勝に導いた実績を持つ。テスト

マッチ歴代最多得点記録を保持し、ラグビー史において「史上最高の司令塔」と称される今も、居残り練習でキックに磨きをかけ、誰にでも気軽に声をかける謙虚で素朴な人柄は、周囲から尊敬を集めている。またラグビープレイヤーとしてだけでなく、「ルイ・ヴィトン」のアンバサダーを務めるなどセレクトな一面も併せもつ親戚のカーター氏に、ラグビーW杯観戦と一っしょに訪れたい、日本のお気に入りスポットをセレクトしてもらった。

1 神戸・三宮

もちろん一番は私が住んでいる神戸です。なかでも三宮は本当に魅力的な街です。通りかかる人々は皆フレンドリーに接してくれ、街全体の雰囲気はゆったりと、リラックスしている。三宮の坂道は、歩いているだけで気持ちが良く綺麗で清潔です。美味しい店もたくさん並び、何度行っても飽きない場所です。

神戸には海や山、丘もあり、街の広さは丁度良い。ワールドカップの試合会場であるノエビアスタジアム神戸までは新幹線や空港からのアクセスも非常に良いため、日帰りでも十分楽しむことができます。三宮には、私がいつも日本に戻って最初の食事に必ず訪れる寿司屋があります。そして魚だけでなく、世界的に有名な「神戸牛」は三宮へ来たら必ず一度は食べて欲しい。神戸牛は、鉄板焼きや焼肉ではなく、ステーキで食べるのが個人的には一番美味しいと思います。

2 京都・伏見稲荷神社

そして京都です。隣接する神戸や大阪でワールドカップを観戦したら、電車で小一時間ほど揺られて京都へ行くことをお勧めします。古き良き日本を感じられ、伝統的な建物や神社に囲まれた街は、全体が魔法にかかったかのような、マジカルな雰囲気に包まれています。

ワールドカップの試合を観るだけでなく、少し足を伸ばして京都を訪れば、観光という枠を超えた日本の伝統的な美しさそのものに触れることができます。なかでも金閣寺と伏見稲荷大社はとても印象に残っています。吸い込まれてしまいそうな伏見稲荷大社の鳥居の道は、神秘的な空気に包まれ、非日常的かつ魅力的です。インスタ映えする写真もたくさん撮れますよ！

3 大阪・道頓堀

大阪は、食べ物が本当に美味しい！大阪は「くいだおれ」の街、食の街とよく言われますが、大阪のワールドカップの試合会場である花園ラグビー場から駅へ向かう通りには、地元の



1



2



3



4



5

方々が集う小さい居酒屋やお好み焼き屋がたくさんあって、食べ歩きも楽しめます。私はたこ焼きが大阪フードの中で一番好きです。花園から電車を乗り継ぎ、大阪ミナミに位置するなんば駅で下車、そこから歩いてすぐの道頓堀橋の近くには、テイクアウトの小さなお店やレストランがたくさんありますが、なかでもたこ焼き屋さんが一番のお薦めです。私が住んでいる神戸と大阪は電車で30分ほどと近く、アクセスが良いので大阪は良く行きますが、道頓堀での食べ歩きも私の大阪の楽しみ方の一つです。

4 東京・表参道

私にとって東京は世界一「クレイジー」な街です。特に夜になると、昼間のオフィス街とは全く姿を変え、一気にナイトライフの顔を見せる。東京へ行くと、そんなクレイジーな街の様相、そして行き交う人々から、いつもものすごいエネルギーを感じます。

そして東京は買い物をするのにベストな街だと思います。東京へ行けば必ずどんな物でも手に入る。そのくらい安全で便利で、整った大都会です。私が東京で一番好きな場所は原宿、青山、表参道エリアです。青山の骨董通りや原宿の裏通りなどへ入ると、たくさんのセレクトショップが並んでいます。ヴィンテージの時計や服など、珍しいものを置いている店も数多くあります。東京では府中市の味の素スタジアムでワールドカップの試合が開催されますが、電車が直通する新宿駅付近、なかでも西新宿エリアには、便利でサービスの良いハイクラスなホテルが多くあります。

5 北海道・札幌、網走

最後は北海道、なかでも札幌と網走です。私は元タカントリーボーイとして育ったので、都会から少し離れてゆっくりしたい時には、

北海道へ行きます。あまり知られていませんが、北海道には世代を超えた根強いラグビー文化が残っており、現地の人々はラグビーを心から愛しています。

札幌で食べる新鮮な蟹などのシーフードは、どの国で食べたものよりも美味しかった。そして野菜です。私は身体づくりのためにできるだけ新鮮で季節に合った野菜や果物を食べるようにしていますが、札幌で食べる地元野菜は本当に新鮮で感動しました。神戸製鋼のチームの合宿では、網走へ行きましたが、網走で食べた寿司も、どこで食べた寿司よりも美味しいものでした。チームでサーモンを何貫食べたか覚えていません！札幌もワールドカップの試合会場の一つとなっています。ぜひとも北海道の食文化を楽しみに訪れてみてください。

私はラグビーの試合と同じくらい、訪れた様々な国を旅して周ることに、多くの時間を費やしてきました。私自身、何度も苦難や試練を経験しています。

最も困難な試練の一つは、2011年に母国ニュージーランドで開催されたワールドカップの大会期間中の練習で負傷し、最後まで試合に出ることが叶わなかったことです。その時は、次の2015年大会の優勝に自分が貢献できるとは、すぐには想像できませんでした。

しかし、2015年の結果があるのは、2014年、精神的にも肉体的にもリフレッシュが必要と感じ、旅をするために思い切ってとった長期休暇のおかげです。この長期休暇が、翌年私を再生してくれました。その経験以来、私は若手選手にも効果的なオフのとり方をすすめています。

休暇をとり、旅に出ることで、悩みから自由になり、再生へとつながる。日本で一生に一度の機会と言われるラグビーW杯期間中に、まだ知らない日本の素晴らしい場所を訪れてみてください。

BAUHAUS INFLUENCE RUNS DEEP IN MODERN LUXURY HOME DESIGN, 100 YEARS LATER

バウハウス創設から100年ーモダンでラグジュアリーな
建築デザインに今なお大きな影響を及ぼす

By Mareesa Nicosia



数多くの才能を輩出したバウハウス。当時デザインされたオリジナルの邸宅が市場に出ることは稀だが、特有のデザインスタイルにインスパイアされたハイエンド住宅は現代においても高い人気を誇っている。

Original homes designed in this unique style are rare, but high-end houses inspired by the prolific design school are abundant

アンドリュー・フランツ・アーキ
テクツが設計した米マサチュ
ーセッツ州のマーサズ・ヴィン
ヤード島にある邸宅。バウハウ
スの影響が見て取れる。

A Bauhaus home on
Martha's Vineyard, Mass.,
by Andrew Franz
Architects



社交の場で「バウハウス」の名前を会話に出せば、相手はクロームメッキのスチールパイプ椅子、優美なティーポット、普遍的な魅力を持つサンセリフの書体などを思い浮かべることだろう。またはテルアビブにある「白亜の街」のような、細長いバルコニーが幾重にも並んだ集合住宅を想起する人もいるかもしれない。バウハウスの哲学に着想を得た1930年代の建築物が数多く残るこのエリアは、マンション、ホテル、レストランなどの高級物件が立ち並ぶ、イスラエルで最もスタイリッシュな街区の一つとして知られている。

14年間という短い期間に膨大な数の作品を生み出したドイツのデザイン教育機関バウハウスは、建築家ヴァルター・グロピウスによって創設された。ナチス・ドイツの弾圧を受けて1933年に閉鎖されるまで、ハanneス・マイヤーやルート

ヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエなどの世界的建築家が学長を務めたことでも知られている。

創設100周年となる今年は、世界各国で記念イベントが行われている。バウハウスの魔法にかかった物事は数多いが、現代のラグジュアリー住宅もその一つであるといえよう。もっともバウハウスが社会的平等の実現を目指していたことを思えば、グロピウスらが今も生きていて、彼らと「ラグジュアリー」がこれほど密接に結びつけられていると知ったら、困惑するかも知れないが。

バウハウスに所属した芸術家たちの当初のミッションは、第1次世界大戦後の住宅不足を解消し、大衆のための家具を製造することだった。こうした計画が大規模に実行されることはなかったが、装飾をそぎ落としたミニマルなデザインと「機能が形態を決定する」という理念の



Mention “Bauhaus” at a cocktail party and you’re likely to conjure up visions of chrome-plated tubular steel chairs, charming teapots or a certain ubiquitous sans serif typeface. For others, the word calls to mind the stacked concrete apartment balconies dotting Tel Aviv’s White City, the Bauhaus-inspired neighborhood that sprang up in the 1930s—and has since transformed into one of Israel’s most upmarket housing, hotel and restaurant scenes.

These and other products came out of the short-lived but prolific German design school founded in 1919 by architect Walter Gropius; it was later led by architects Hannes Meyer and Ludwig Mies van der Rohe before closing under pressure from the Nazis in 1933.

As the centennial of the school’s founding is celebrated around the world this summer, we can add contemporary luxury homes to the long list of things touched by the Bauhaus spell—though Gropius and his cohort might be dismayed if they were alive today to hear “luxury” too closely associated with them, since egalitarianism was central to the Bauhaus movement.

Part of the artists’ early mission was to help solve the post-World War I housing crisis and produce furniture for the masses; while these plans didn’t succeed at scale, the Bauhaus’s rejection of ornamentation and its ideal that functionality drives form far outlived the physical school. And when it comes to real estate, a building aesthetic

影響は、開校から100年が経過した現在も衰えることはない。また不動産においても、一般の人々のための建築を志向したバウハウスのデザインが、皮肉なことに、洗練された趣味を持つ裕福なホームオーナーたちの間で高い人気を誇っているのも事実だ。

今日の住宅・商業建築にも、ガラスとスチールを多用し、直線を活かした幾何学的なバウハウスのデザインは広く見受けられる、と語るのは建築学者・作家であり、米コネチカット州ニューカナンにあるミュージアム「グラスハウス」(＝ガラスの家)のチーフキュレーター兼クリエイティブディレクターを務めるヒラリー・ルイス氏。グラスハウスは、建築家フィリップ・ジョンソンの元自邸で、現在は美術館として運営されている。「バウハウスは、20世紀にモダニズムの考えを広めた中心的存在で、その影響から逃れることはできません。今日も“モダンデザイン”は私たちの生活の一部として深く根付いており、それはテルアビブやマイアミ、アスペン、フランス南部、サンパウロなど、あらゆる場所で確認できます。今日において、世界の大半の現代建築家が建物をデザインする様式なのです」

新旧の融合

1933年にバウハウスが閉鎖されると教授や生徒たちはドイツを逃れ、ブダペストやスイスな



どヨーロッパ全土に散らばっていった。グロピウスとその家族はロンドンに一時滞在した後、1937年に米マサチューセッツ州ボストン近郊の街リンカーンの郊外に2300平方フィート(約214平方メートル)の手ごろな大きさの家を建てた。現在、グロピウス邸は歴史的に重要な邸宅博物館として、保全団体「ヒストリック・ニューイングランド」が管理・運営している。同団体のビクター・ギトルマン氏によると、グロピウスと妻イセ

はこの家で世界中から訪れる建築家、アーティストを始めとする関係者らとの活発な交流を長年に渡って続け、その結果、グロピウス邸は離散したバウハウス派が集まるメッカとして知られるようになったという。

グロピウス夫妻の邸宅は、アメリカ人に「モダン・ニューイングランド・スタイル」という建築スタイルを知らしめたが、中央に排水パイプを通した平屋根など、当時としては見慣れないデザインのため、近所の住人は懐疑的な眼差しを向

that was intended to serve the everyman has ironically ended up in vogue with wealthy homeowners with refined tastes.

Clean lines made with copious glass and steel are pervasive in today's residential and commercial architecture, said Hilary Lewis, an architecture scholar, author and chief curator and creative director at The Glass House in New Canaan, Conn., the former residence of architect Philip Johnson that is now a museum.

"There's no getting away from the influence of the Bauhaus because it is really the center that helped to popularize the idea of 'modern' in the 20th century, and we live with that very much today, and that's whether you're looking at Tel Aviv, looking at Miami, in Aspen, the south of France, or São Paulo," Ms. Lewis said. "This is the way most contemporary architects build today."

Mixing Old and New

The Bauhaus school closed in 1933, teachers and students left Germany and scattered to Budapest, Switzerland and elsewhere in Europe. Gropius and his family briefly moved to London and finally settled near

Boston in 1937, where he designed and built a modest 2,300-square-foot home in Lincoln, Mass., just outside of the city. It became the New England mecca of the Bauhaus diaspora where Gropius and his wife, Ise, welcomed architects, artists and other visiting associates for years, said Peter Gittleman, the visitor experience team leader at Historic New England, a preservation organization that now owns the property and runs it as a historic house museum.

Their home also introduced Americans to the idea of a "modern New England house" but it was received with skepticism from the neighbors because of unusual features such as its flat roof, which had a drain pipe in the middle, Mr. Gittleman said. Gropius's then-12-year-old daughter, Ati, asked for her own private entrance to the house and her father obliged with an outdoor spiral staircase attached to her bedroom window.

The house was a testament to the idea that buildings should stand in tune with their surrounding environment, as is evident in the combination of traditional New England materials such as wood, brick and fieldstone. But Gropius combined them with what were

then considered innovative touches, such as a large opaque glass panel at the front entrance and sound-absorbing acoustic plaster.

"In every case, he took what was available to him and what the local vernacular architecture presented and updated it for the 20th century," Mr. Gittleman said.

A few years later, Gropius and partner Marcel Breuer took this concept and cranked it up several notches, together producing the Alan I W Frank House and all its furnishings for a steel industry magnate in Pittsburgh. The private residence is arguably the architects' most significant project, with nine bedrooms, 13 bathrooms, an indoor swimming pool, five terraces and a rooftop dance floor. The main building measures 12,000 square feet, plus 5,000 additional square feet of outdoor space.

These days, newly built modernist homes that draw on Bauhaus sensibilities are widely available through resale or commissions. But opportunities to purchase high-end, single-family Bauhaus-era homes are rare.

One current listing offers a flat-roofed, Bauhaus-style villa with seven bedrooms and four bathrooms overlooking a pristine

けていたとギトルマン氏は言う。当時12歳だった娘アティに自分専用の玄関を作るよう頼まれたグロピウスは、彼女のベッドルームの窓の外に螺旋階段を付けたほどだった。

木材、レンガ、自然石という伝統的なニューイングランド地方の建材を使って建てられたこの邸宅を眺めていると、建物と周辺環境との調和を何よりも重んじたグロピウスの理念がヒシヒシと伝わってくる。しかし同時に、グロピウスはその基本理念を維持しながらも、正面玄関に採用した不透明の大きなガラスパネルや防音のための石膏など、当時としては斬新だった素材を融合している。

「グロピウスは常に、入手できる素材を使い、土地特有の建築からアイデアを得て、20世紀という新しい時代に合わせた設計を志向していました」とギトルマン氏は言う。

数年後、グロピウスとパートナーであるマルセル・プロイヤーは、このコンセプトをさらに磨き上げ、ピッツバーグの鉄鋼業界で財を成した権力者の自邸「アラン・I W・フランク・ハウス」の設計と、インテリア家具全てのプロデュースを請け負った。グロピウスのキャリア史上最も重要なプロジェクトといわれるこの個人邸宅は、9つのベッドルーム、13のバスルーム、室内プール、5つのテラスに加えて、屋上にはダンスフロアを備えている。広さ1万2000平方フィートの母屋は、周囲を5000平方フィートの庭に囲まれている。

lake and mountains in the village of Ascona in southern Switzerland. The home was built in 1934 by German architect Carl Weidemeyer; he didn't attend the Bauhaus school but he familiarized himself with the movement as a young man, according to Ueli Schnorf, co-owner of listing agency Wetag Consulting, a Swiss affiliate of Christie's International Real Estate.

Mr. Schnorf said the home has been owned by several generations of the same family since it was built and it's on the market now for the first time ever, asking SFr6.23 million (about US\$6.3 million). It is one of the few buildings of the period that are still standing, he said.

“When you buy something like this, you buy a piece of history,” he said.

Quantifying the number of existing Bauhaus and Bauhaus-inspired homes is difficult because the movement has inspiration from both Bauhaus philosophy and various other architects when they undertook a 5,000-square-foot vacation home commission on Martha's Vineyard a few years ago. The owners, who describe themselves as “an introverted Manhattan couple who both work from home” and

have two teenage children, asked for a window seat/reading nook for each person in their family of four—cozy spots where they could retreat to while maintaining some connection to the rest of the house. Since form follows function, those types of priorities drove the design plans.

They also chose materials that fused tradition and energy efficiency. The Meadow Beach House, completed in 2016, has a shingled, white cedar exterior and a field-stone chimney, typical of New England homes. Extra-thick insulation underneath the shingles helps seal it against the elements



スイス・アスコナの町にあるバウハウス時代建てられたヴィラ。設計は建築家カール・ヴァイデマイヤー。

A Bauhaus-era villa in Ascona, Switzerland, by architect Carl Weidemeyer

“There’s no getting away from the influence of the Bauhaus because it is really the center that helped to popularize the idea of ‘modern’ in the 20th century”

バウハウスは、20世紀にモダニズムの考えを広めた中心的存在で、今日でもその影響から逃れることはできません

近年では、中古、注文住宅の違いを問わず、バウハウスの理念に影響を受けたモダニスト・スタイルの新たに建てられた家を探すことはそれほど難しくない。しかし、バウハウス全盛期に建てられたハイエンドの一戸建てを購入できるチャンスは稀だ。

しかし今なら、スイス南部アスコナの村にある物件が市場に出ている。澄み切った湖と緑豊かな山々の絶景を望み、バウハウス・スタイルの平屋根が特徴のヴィラで、7つのベッドルームと4つのバスルームを備えている。クリスティーズ・インターナショナル・リアルエステート傘下の不動産仲介業者「ヴィタク・コンサルティング」の共同オーナー、ウエリ・シュノーフ氏によると、1934年にこの家を建てたのは、ドイツ人建築家のカール・ヴァイデマイヤーで、バウハウスの生徒ではなかったものの、若い頃からこの新しいデザインの潮流に親しんでいたという。

竣工以来、数世代に渡って同じ一家が所有してきたこの邸宅が市場に出るのは今回が初めてだという。提示価格は623万スイスフラン（約6億7120万円）で、同時期に建てられた邸宅の中でも、現存している数少ない物件だという。「このような物件を購入するのは、すなわち歴史の一片を買うのと同義です」とシュノーフ氏は述べる。

創立から100年を経たバウハウスの影響は、

その年月を通して世界各国へと波及したため、現存するオリジナルのバウハウス住宅と、バウハウスの影響を受けて建設された住宅の数を正確に把握するのは非常に困難だと専門家は言う。ニューイングランド地方を筆頭に、バウハウス出身のヘルベルト・バイヤーが第2次世界大戦後に居を定めた米コロラド州アスペン、ミース・ファン・デル・ローエが活躍したシカゴ、マルセル・ブロイヤーが長年暮らしたブダペストにもバウハウスの影響が色濃く残る建物が現存している。

機能がデザインを決定する

ニューヨーク市にある建築事務所「アンドリュウ・フランツ・アーキテクト」でアソシエイトを務めるアン・メイソン・ケンパー氏によると、「デザインによってより良い日常生活を実現する」という現代の建築家が当然視している考え方は、今でこそ至極真っ当に聞こえるが、バウハウスが誕生して間もない時代には、急進的なコンセプトだったという。

現在手がけているプロジェクトを引き合いに出して、ケンパー氏はバウハウスの影響について、「バウハウスの思想が私たちの意識の中にすでに深く浸透しているため、空間をデザインする際、ほとんど無意識の、あるいは潜在意識の領域でその影響が作用している」と考えてい

るという。（注文住宅をオーダーする際、明確に「バウハウス・スタイル」を望むのではなく、「モダニスト・スタイル」をリクエストするクライアントが多いと建築家たちは本誌に語っているが、もしかするとケンパー氏の考察こそがその理由なのかもしれない。）

数年前、米マサチューセッツ州にあるマーサズ・ヴィンヤード島で、広さ5000平方フィートの別荘の建築を依頼された際、ケンパー氏とその同僚はバウハウスの哲学だけでなく、様々な建築家たちの作品にインスピレーションを求めたという。「2人とも自宅の仕事をしている内向的なマンハッタン在住のカップル」と自身のプロフィールを説明するオーナー夫妻には、10代の子どもが2人いる。彼らからのリクエストは、家族4人それぞれのために、窓のある読書のための空間、つまり完全に隔離されてはいないが、好きな時に一人こもってリラックスできるような快適な空間を作ることだったという。「機能がデザインを決定する」。この原則どおり、オーナーの優先事項を前提に設計図が決まっていた。

またケンパー氏率いるチームは、伝統を感じさせる質感とエネルギー効率を兼ね備えた素材をこの邸宅のためにチョイスしたという。こうして2016年に完成した「メドウ・ビーチ・ハウス」は、ニューイングランド地方にある邸宅らしく、ホワイトシダーで覆われた外壁と自然石の煙突を

米ニューヨーク州ブリッジハンプトンにあるサム・クリーク・ハウス。

Sam's Creek House
in Bridgehampton,
New York



持つ。また壁板の裏に入れる断熱材を通常より厚くすることで、寒暖の差から家を守りつつ、ガラスパネルを多用することで自然光をたっぷりと採り入れられる構造になっている。

この邸宅でメインとなるリビングエリアの天井を飾る未塗装のオーク材でできた梁を指差しながらケンパー氏は、「私たちは装飾に頼るのではなく、反対にシンプルさを追求し、クラフツマンシップが表現されるようにしたのです」と説明してくれた。

アウトドアを屋内に採り入れる

ニューヨーク市にベースを置く「MBBアーキテクト」のパートナーである、建築家のメアリー・バーナム氏は、同事務所が2016年に手がけた米ニューヨーク州ブリッジハンプトンの別荘プロジェクトで、「室内と屋外の境界を曖昧にする」というバウハウスのもう一つのテーマに取り組んだという。(これは、広義のモダニストスタイルでも重要なテーマである。)

5ベッドルームある「サムズ・クリーク・ハウス」は、カジュアルなスタイルのキッチン・ダイニング・リビングエリアが特徴で、半屋外のベランダと、母屋の端から端まで続く屋外テラスが室内外の一体感を演出している。また、邸宅の至る所から広大な芝生とプールを望める構造になっている。

and abundant glass paneling allows for plentiful natural light exposure.

“We really strove for simplicity as opposed to ornamentation and let craft take the place of ornaments,” Ms. Kemper said, noting the exposed oak ceiling beams throughout the main living area, which were left unpainted.

Bringing Outdoors In

Architect Mary Burnham, a partner at MBB Architects in New York City, said a second-home project her firm did in Bridgehampton, New York, in 2016 tapped into another Bauhaus theme of blurring the line between indoor and outdoor living (the idea is a key part of the broader modernist style).

The five-bedroom Sam’s Creek home features an informal kitchen-dining-living area that transitions to a screened porch to a large open-air terrace with grill set—that runs along the length of the main house, all of which overlooks a sweeping lawn and a pool.

“The idea was to build a house that was going to be enough of an incentive to keep my children coming back, to have them

夫と共にこの家を所有するエリザベス・ターナー氏は「子どもたちが何歳になっても、実家に帰って来たいと思えるような家、ここにずっと住みたい、友だちを招待したいと思えるような家を建てたいと考えたのです。この家を、誰もが訪れたいと思える場所にしたいかったです」と語る。2人には今年大学に入学する18歳の双子の息子がいる。

ターナー氏と未公開株式投資会社でシニア・パートナーを務める夫は、1年の大半をニューヨーク市内で過ごす、夏の週末には時折、親戚を招いてハンプトンにあるこの1250万ドル(約13億1700万円)の別荘で過ごすという。彼女のお気に入り、オープンな間取りとガラス製スライディングドア。キッチンにいながら、ベランダのグリルでバーベキューをしている夫とスムーズに協力して調理を進めることができるという。そんな2人はテラスで食事を取ることが多いという。

住宅を設計する際、そこに暮らす人々が、家そしてその外の世界とどのようなつながりを築きたいと望んでいるかを重視しているとバーナム氏は語る。

「その昔、グロピウスやミースが住宅の設計をしていた時も、これと非常に近いテーマを追求していたのではないのでしょうか。こういった建築的テーマにはまだまだ探求の余地があると思います」

want to be here, bring their friends over. We wanted it to be a place where everyone would want to be,” said Elisabeth Turner, who owns the home with her husband. The couple has twin 18-year-old sons who are heading to college this year.

Ms. Turner and her husband, a senior partner at a private equity firm, live in New York City most of the year but spend summer weekends at the US\$12.5 million Hamptons house, often with relatives. Her favorite feature is the open floor plan and sliding glass doors that allow her to prep meals in the kitchen and seamlessly coordinate with her husband while he grills on the porch. They eat most meals outside, she said.

Thinking about the inhabitants’ desired relationship with the house and with the outside world while they are at home is important while designing it, Ms. Burnham said.

“I think way back when Gropius and Mies were designing houses, these were very much similar themes that they were exploring, (and) I don’t think those themes have been exhausted yet,” she said.

ラグジュアリーな 物件情報がお手元に

日本国内のみならず世界中の高級物件に関するニュースをお届けするMansion Global Japanのニュースレターは、毎週メール配信されます。



無料のニュースレターを購読すると…

- ▶ 最新の物件情報
- ▶ ライフスタイル関連記事
- ▶ 新規開発プロジェクト情報
- ▶ さらにイベント情報など充実のコンテンツが配信されます。

MANSION GLOBAL
JAPAN

いますぐ
購読する!



問い合わせ先 エドワード・ヴォンドラ:
+81-3-4540-7730 | edvard@custom-media.com

mansionglobal.jp

フィリップ・ジョンソンから今日のモダニズム建築家まで、ガラス張りを特徴とする邸宅デザインは世代を超えて世界中で愛されてきた。

Timeless Glass Houses

The Architectural Style Endures

“グラスハウス”の色あせない魅力と
今に通じる建築様式

By Mareesa Nicosia



インディアナポリス北部にあるデボラ・パーク氏が設計した3500平方フィート(約325平方メートル)のガラス張り邸宅。
GLINT STUDIOS

かの有名なフィリップ・ジョンソンの「グラスハウス」は1949年に米国コネチカット州ニューカナンに建設された。直線的な平屋建築が特徴の邸宅は、当時、誰が見ても前衛的なものだった。以来70年の年月が経過する間に、プリツカー賞を受賞したこの建築家のミニマルなデザインは世界に広がり、ニューヨーク州北部の森から太陽と海がきらめく太平洋側まで、さらにはカリフォルニア州から南のニカラグア共和国までの広い範囲で、ガラスで作られた邸宅の人気は高まっていった。

人里離れたロケーションと広大な土地がある山間部や熱帯地方では、ガラス張りの邸宅に住むオーナーは360度広がるパノラマの絶景を堪能することができる。しかし、東京のように人口密度が高い都市でも、モダンなガラスを使った意匠の魅力は人々の心をつかみ、個性的な邸宅やタワーマンションのデザインに採用されている。

「Mansion Global」は、世界各国でプロジェクトを手掛ける建築家たちにインタビューを行い、どのようにして美しいデザインと機能性を兼ね備えたデザインを実現し、現代のライフスタイルに欠かせない様々なニーズを満足させるガラスの家を生み出してきたのか、話を聞いた。建築家たちは、原型である「グラスハウス」に敬意を表しつつも、さらにそれを超える建築を生み出してきた。



グローバリズムの影響

米ニューイングランド地方やニューヨーク州の森には、数多くのグラスハウスが立ち並んでいる。それも、ジョンソンもメンバーの一人だったハーバード大学デザイン大学院卒の建築家グループ「ハーバード5」の本拠地に近いことを考えれば納得がいくだろう。彼らは1940年代にニューカナーンを活動の拠点に定め、およそ100件のモダンな住宅のデザインを手掛けた。

現在「グラスハウス」はナショナルトラストが所有し、美術館として運営されている。同館でチーフキュレーター兼クリエイティブディレクターを務めるヒラリー・ルイス氏によると、モダンなミッドセンチュリーデザインは、コネチカット州と同様にカリフォルニア州やフロリダ州でも人気が高まり、建築家たちはそれぞれの土地の文化や気候の影響を反映した独自のデザインを作り上げていったという。

「フロリダではラテンスタイルが強まり、ブラジルやキューバの影響が色濃く出ているものもあります。カリフォルニアでは、過ごしやすい気候が独自の実験的なスタイルの発達を可能にしました。一方、北東部では伝統的なスタイルが好まれ、ヨーロッパのモデルに近いと言えます」とルイス氏は語る。

また過去数十年間、グローバリズムが進んだことで、建築の世界でも地域特性の影響は弱まり、より国際的なスタイルが広がってきているという。

都市部の人口が急激に増加するなかで、ガラスという素材の多機能性、なかでも現代のデジタル生活に溶け込む大きな潜在力が注目され、ドバイやパリといった都市で、住宅や商業ビルのデザインにガラスが多用されるようになってきている。

「ハイクラスなラグジュアリー住宅の建設でモダンデザインが採用される傾向は従来と比べて非常に強まっています」とルイス氏は言う。「ガラス素材は、非常に現代的な印象を与えるのです」。

東京に拠点を置く建築家、柄沢祐輔氏は哲学者であるクライアントのため、埼玉県に小さなガラス張りの邸宅を設計した際、現代人が暮らす情報化社会だけでなく、その街の曲がりくねった狭い道からもインスピレーションを得たという。約100平方メートルの「S-house」では、内部に連続して設けられた短い階段が、建物内部に中二階が続いているような効果を生み出している。「中にいると3倍は広い家に暮らしているような気がするでしょう」と柄沢氏は言う。この家に一人で暮らす住人は、プライバシーが欲しいときは壁の端から端までカーテンを閉め切ることができる。

リーズナブルな建設コスト

ロサンゼルスに拠点を置く建築家、デイビッド・モンタルバ氏によると、この10年間で人件費が高騰し、その結果、生産に人手がかかる建築

資材の価格も上昇したが、ガラスは比較的手ごろな価格帯を維持しているという。2011年にロサンゼルス・ウェストリッジ地区で5400平方フィート（約500平方メートル）の住宅のリノベーションと増築を行った際のコストは、1平方フィートあたり450ドル（約4万7800円）だったという。この物件は、床から天井までである巨大なガラス窓から270度まで見渡せるロサンゼルスダウンタウンと太平洋の眺望が自慢だ。

これと同様に、近隣のサンタモニカで建設中の住宅では、総額500万ドルの建設費用のうち、ガラス窓にかかるコストは約50万ドルだという。

「確かに大きな金額ですが、建物全体のコストから考えるとそれほど割合は高くありません」とモンタルバ氏は言う。

またモンタルバ氏のクライアントの間では、ガラスの引き戸や、プライバシーを保つのに役立つ、スイッチひとつで曇りガラスになる建築用高機能ガラスなどが人気だという。

2010年には、ロサンゼルス・マンデヴィル・キャンニオンにある邸宅のリノベーションを行ったが、この時の費用は100万ドル。これには天井高を引き上げる改修、天窓増築、書斎からリビング&ダイニングエリアまで続くガラスの引き戸でできた長い壁面の設置費用までが含まれていた。屋内のどこにいてもガラス窓を通して、乾いた気候に耐えられる植物が植わった庭園を眺めることができる。



上：東京に拠点を置く建築家、柄沢祐輔氏は、埼玉県内の住宅の設計に際して、現代の情報化時代にインスパイアされたと語る。
KOICHI TORIMURA

左：ニューヨーク州セントにあるキャッツキル・マウンテンを望む6000平方フィート（約557平方メートル）の長方形住宅。デザインは森俊子氏。
PAUL WARCHOL

住宅の面積は2400平方フィート（約220平方メートル）だが、オーナーであるイラストレーターのベッツィー・エヴェリット氏（56）は「家のどこからでも庭が目に入るので、まるで家が2倍広くなったような印象です」と語る。

また、エヴェリット氏は創作活動を行うスタジオに注ぎ込む自然光も最高だという。

米テネシー州ノックスビルに拠点を置く不動産業者、バーバラ・アップキング氏によると、モダニストの巨匠、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエのもとで修業したウィリアム・スターク・シェルが設計した同州のグラスハウスが昨年秋に57万5000ドル（約6200万円）で売却されたという。

イギリスでは、例えば建築家リチャード・ホークスがデザインした5ベッドルームのガラス張りのツリーハウスのように、他の建築物とは一味も二味も違うグラスハウスを購入しようと思えば、100万ポンド（約1億3400万円）はかかる。

気温をコントロールする

ジョンソンが「グラスハウス」をデザインする際、そのビジョンの中核となったのは、住人がどの部屋にいても周囲の素晴らしい景色を楽しむ、自然とのつながりを感じられるという考えだった。今日、建築資材は目覚ましい進化を遂げているが、ガラス張りの高級物件をデザインする現代の建築

家たちは、このジョンソンのビジョンを今でも支持している。

「人々は自然との一体感を強く求めます。そして今再びガラスの壁が持つシンプルさが評価されるようになっていきます」と語るのは、イエール大学の建築大学院学長であり、ニューヨークで建築事務所を主宰する建築家、デボラ・パーク氏。しかし高機能の巨大なガラスパネルを支える技術は「単純さとは程遠い」という。

現在のガラス張り建造物では、ジョンソンが1940年代に使った一重ガラスではなく、より効率的に室温を管理できる二重、三重ガラスが標準装備となっている。「今日では、環境に配慮する意識が高まっていますし、実際これがあるべき姿でもあります。ですから、建築家の役割は、ガラスがもたらす屋外との視覚的なつながりとガラスの機能性の程よいバランスを取るることなのです」とパーク氏は言う。

そのパーク氏がインディアナポリス北部にある3500平方フィート（約325平方メートル）のガラス張り邸宅を設計した際に重視したのは、まさにこの点だったという。豊かな森の中にある家からは草原に覆われた斜面を見渡すことができる。長い屋根には幅の広いオーバーハングがあり、引き戸になっているガラス戸の上に屋根が浮かんでいるように見える。このオーバーハングは複数の機能的役割も果たしている。開放的なガラスのおかげで景色を存分に楽しむことができる一方、晴れた夏の日には

オーバーハングが庇（ひさし）となって直射日光を遮断し、また寒い時季にはその厳しい気象条件から家自体を守ってくれるのだ。

ニューヨークを拠点とする建築事務所を主宰し、ハーバード大学の建築学科で教鞭を執る建築家、森俊子氏は、どのような土地においても、ガラス張りの邸宅を建築する際には、太陽の光が差し込む角度を考慮しなくてはならないとアドバイスする。

「設計の腕の見せ所は、機能性を確保しつつ景色を最大限活かす絶妙な配置を見出すことです。そうしなければ家の中が耐えられないほど暑くなってしまう」と森氏は言う。

「例えばアメリカ北東部では冬でも、降り積もった雪に太陽が反射してガラス張り邸宅の室温はすぐに上昇するのです」と森氏は続ける。

また南北アメリカなど西半球エリアの、特に気候が温暖で水辺に面したロケーションでは、過度の照りつけや室温の上昇を防ぐため、西に直接向いた開口部には日除けスクリーンやオーバーハングなどを十分に設けることが必要だ。

森氏は実際、ニカラガ南西部のプロジェクトでこのアプローチを用いたという。この邸宅は太平洋に近く、360度の眺望を堪能できる。

「ニカラガの日光はとても強力なので、ガラス戸を通常より建物の内側に配置して、バルコニーを設置しました。しかしそれでも、眺望は壮観です」と彼女は言う。

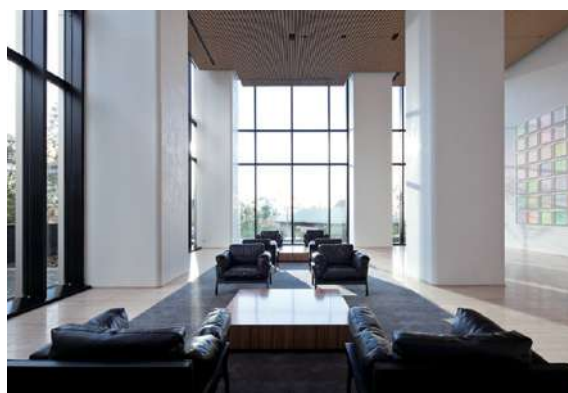
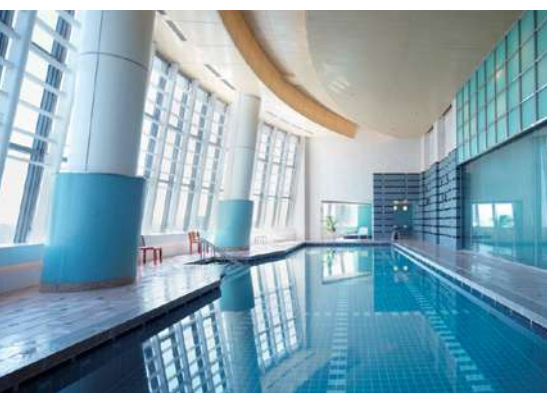


Time for an upgrade Time for MORI LIVING

An English-speaking concierge who helps you book a table at one of the city's hottest restaurants. On-site gym and spa facilities that will help you look and feel your best. If you're looking for long-term lease properties with a full range of services in convenient locations around Tokyo, it's time to upgrade to MORI LIVING.

MORI LIVING

www.moriliving.com



白金台四丁目

THE CLASS

THE SANMAISON 白金台



Living Dining ※掲載の写真はモデルルーム(Mタイプ)を撮影(2019年7月)したもので、有償オプション・個別設計変更・造作家具・照明・調度品等も含まれており、実際の仕様・仕上げとは異なります。また、家具・調度品等は販売価格に含まれません。

東京メトロ南北線「白金台」駅徒歩4分^{*}
都営地下鉄三田線「白金台」駅徒歩4分^{*}

^{*}東京メトロ南北線、都営地下鉄三田線「白金台」駅1番出口徒歩4分(6:00～23:00利用制限時間あり)、東京メトロ南北線、都営地下鉄三田線「白金台」駅2番出口徒歩5分

「THE SANMAISON 白金台」公式ホームページはこちら

モデルルーム公開中

ザ・サンメゾン白金台

検索



お問い合わせは ザ・サンメゾングェストサロン

0120-340-667

営業時間／平日11:00～18:00
土・日・祝10:00～18:00
定休日／水・木・第二火曜日(祝日除く)

[完主]

人と地球がはろこぶ住まい



サンヨーホームズ

[販売提携(代理)]

あしたを、つなぐ 野村不動産グループ



野村不動産アーバンネット